

どこか、遠いかなたから

眼科病棟四階四〇七号室のドアを入ると、窓側のベッドに母が居た。「どうして昨日の電話で知らせてくれなんなの!」と私。「心配かけると思うたし、白内障の手術は簡単と言われたけん」と母。あの朝、いくらかけ直しても繋がらない電話に胸騒ぎした私は、母のかかりつけの先生へ問い合わせ、事を知ったのだった。私は、仕事と家庭の段取りをつけて、広島行きの電車に飛び乗った。親子なのに遠慮なんかして、と、母に腹が立った。

気丈に見えた母だけど、眼の手術は初めてだ。血圧を測られると一八〇もあって、手術の時間を遅らせてくれることになった。私は、母から鍵を借り、勝手知ったる我が実家へ急いだ。母の好きな五木ひろしのCDは、すぐ見つかった。それを持って再び病院へ戻り、イヤホンで母に聞かせた。血圧が正常に戻った。無事手術を終えた母の開口一番は、「あなたが白内障の手術の時は、お母さん行ってあげるけえね」だった。仮にその時が三十年先として、母は百十一歳になっているはず。私は、どんな言葉を返したのか覚えていない。

やがて私も七十歳半ばになった夏、白内障の手術を受けることになった。周りは大丈夫よと言ってくれるものの、自分の事になると緊張した。手術台の上で、私は身を固くして手を握りしめていた。ところが気持ちとは裏腹に、ウトウトし始めたのだった。すると、夢なのか、母が私をのぞき込んでいる。子供の頃、いつも見たやさしい愛顔で私をつつみ、手術の間中そばに居てくれたのだった。私は、とても安らいでいた。

主治医の先生の「はい、終わりましたよ」と言う声で私は我に返った。病室のベッドに戻って考えた。少しずつ記憶が蘇ってきたのだった。母は、約束してくれたことを忘れていなかった。ありがとう…と私は何度も呟いた。私の胸の中で、母の愛顔が灯り続けた。

あの日、母は、どこから来てくれたのだろうと今も思う。

